

2011 わたしのおすすめ3作品

原稿締め切り 2012年3月31日、到着順に掲載

● 杉野 実

1◆ 今村仁司『親鸞と学的精神』（岩波書店）

このコーナーではじめて宗教関係書を取りあげます。宗教から神秘的なものを全部とりのぞいたら最後になにが残るか、とよく考えるのですが、この本がひとつの解答をしめしています。仏教でいう煩惱とは無知のこと、その無知というのは「個人が我欲を迫及するだけでは社会がいきづまる」との道理をわきまえぬこと、そしてみんながその道理をわきまえた状態が極楽である…。こう書くと無意味なおとぎ話のようでもあります。親鸞以前の、たとえばブッダや孔子の時代だって、そういう理想を追求する人類のあゆみの一歩だったのだから、現代ならなおのこと理想へのあゆみを大きくすすめられるはずだ、といわれると非常に勇気づけられます。もっとも現代には現代固有の困難もあって、「ヒトがヒト以外の生物の存在について真剣に考える」ことが、現代ほど切実に要求されている時代もかつてなかったと著者はいうのですが。

2◆ 「茨城県笠間市在住の親戚を訪問」（2011年2月）

去年の「私の3点」で、たしか水泳競技会での経験を書いた方がおられたと思うので、こういうのもたまにはいいかな、って。私の住所は市川ですが、松戸にも近いので、常磐線にのってしまえば、笠間市にも3時間とかからないで到着します。「意外に近かったのね茨城」ですけど、まがりなりにも「都会」である市川・松戸とは、やっぱりちがうところもありますよ。まず親戚の家に滞在していると、「すぐ近所に住んでいる親戚連中」が、つぎつぎとたずねてくるのですよね。ちょっとおそくなくてもよりの駅まで車で送ってもらいましたが、その駅員さんも親戚のおじさんの（親戚じゃないけど）友人でした。駅員さんも農業を兼業していて、農機がちょっと故障したら新しいのに買いかえろと販売員にしつこくすすめられたのだけど、その販売員もふたりの「知人の息子」だったとか! 「みんなが顔見知り」のコミュニティ、まだあるんですね。

3◆ セオドア・グレイ『世界で一番美しい元素図鑑』（創元社）

今年の自然科学関係記事は、かの有名な(?)化学関係のベストセラーです。どこからでもランダムな読み方ができる本なので、名前がよく知っている元素を3つばかり取りあげてみましょう。原子番号81のタリウム、有名な毒性元素なので、ご存知の方も多いでしょう。タリウムによる殺人は、なぜ今日でも判別が容易でないのか? 「嘔吐、脱毛、精神錯乱、目が見えない、腹痛。おわかりでしょう、こういう症状を起こす原因はいくらでも考えられます。」原子番号90トリウムは、毒は毒でも放射性元素です。1930年代に「放射能ブーム」というのがあったとき(!)、トリウム入り「健康飲料水」を飲みすぎた有名な大富豪は、あごの骨が壊死して死んでしまったとか。原子番号69ツリウムは、こういう連中にくらべてな

んとも地味で、「一番どうでもいい元素」とさえよばれますが、「緑色の輝線を出す」特技があって、実は照明灯設計技師のお気に入りなのです。

● 猪野 修治

1◆ 綾部 誠, 井上 肇, 新関 寧, 丸山弘志『市民の力で東北復興』（ほんの木、2012年1月）

本書は山形県米沢市を拠点する「ボランティア山形」の東日本大震災支援活動の記録である。大震災・原発事故にいかに対処するかという災害ボランティアの組織・運営の最前線が記録されている。帯に記された文章をあげておこう。「福島から原発事故による避難者を迎え入れ、立ち上がった山形県米沢市民と、全国から支援に結集した心ある仲間たち。宮城、岩手、福島各県の津波被災地にも物質とボランティアを送り続け、その運営体制と実践力は高く評価された。ここには新しい「市民の力」がある。新しい時代への災害ボランティア論。ボランティア山形は1995年1月の阪神淡路大震災時に、米沢生活協同組合（現・生活クラブやまがた生活協同組合）の緊急支援策として、広く山形県民に呼びかけて組織した。特徴的なのは災害時になると活動を再開するところや、活動メンバーはその都度募集することもある。他のボランティア組織に入って活動することもある。東日本大震災救援活動では従来の物質供給や人的支援に加えて、各ボランティア団体や大学、行政などと連携をして、避難者支援や政策提言などを行う中間支援組織的な役割が大きな柱になっている」。

2012年2月23日本書の出版記念フォーラムが東京の竹橋であり妻と参加し、じっくり活動の様子を聞き大きな感動を受けた。災害時において地域と地域がつながるとはどういうことなのかと具体的に示し、その献身的な姿勢にただただ脱帽するのみである。米沢市は私たち夫婦の故郷でもあるので、ボランティア山形の活動の様子はよく見える。感謝したい。

2◆ 佐々木 力『ガロア正伝—革命家にして数学者』（ちくま学芸文庫、2011年7月）

日本人の科学史（数学史）家による本格的なガロア伝である、裏表紙に次のように記されている。「代数方程式に関するガロア理論はもっとも美しい数学のひとつと言われる。しかし、その理論が解説され、教育制度に根づくには数学者たち多大な努力が必要であった。ガロアはまた急進的共和主義革命家としても知られた。天才数学者にして革命家——本書はその実相を描き、さらに、これまで最大の謎とされてきた決闘死の真相に迫る。決闘前夜の友人宛書信をはじめ自筆原稿を丁寧に読み、真実一路の夭折の生をまっとうした青年の稀有の生涯を再構成する。厳密な歴史学的手法を駆使し、既成の創作的伝記をトータルに超越しようとする正伝。著者は本書の内容を基に、ガロア生誕200年の2011年、フランス学士院科学アカデミーから講演を招聘された」。

たしかにわれら1960年代世代の自然科学系の学徒にとっては「若干20歳で決闘死した数学者にして革命家」のガロアは魅力的な人物だ。そもそも私がガロア存在を知ったのは、L・インフェルト『ガロアの生涯—神々の愛でし人』（市井三郎訳、日本評論社、1969年）からであった。本書は非常に面白い読み物で夢中になって読んだ記憶がある。日本語の文章（訳文）も見事で大きな影響を受けた。しか

し、著者のインフェルトも認めているように、多少のフィクションを織り交ぜながら読み物としている。そうであっても読者にはガロアの全体像を知るには有益だった。これに対してかねてよりそのフィクション（創作的伝記）に批判的な問題提起をしてきた日本の数学史家がガロアの直筆の論文、周辺の歴史的事情のフランス語原点を読み解き、正しい数学史書として論じたものだ。インフェルトの伝記に比較すると面白さに欠けるが真実に近いガロア伝が出た意味が大きい。

3◆ 山本義隆『福島原発事故をめぐって—いくつか学び考えたこと—』（みすず書房、2011年8月）

本書に関して私は「週刊読書人」（2011年10月7日）に「平易な言葉で語るべきことを語り尽くした若者へのメッセージ」という見出しをつけて論評したことがあったので、あまり繰り返すことを禁欲するが、やはり、今でも本書は長い間、物理学・物理学史・物理教育に専念してきた著者が在野の学者・教育者として真摯にわかりやすい言葉で述べた本質的・根源的な著作だと思っている。何よりも本書の特徴は現在進行形で複雑多義な論議がなされている中で、その気になればだれにでも容易に入手できる資料（書物）を読み解き分析し、著者の原発問題に関する基本的な態度と理念を正直に証明したことにある。繰り返し読み継がれる書物だと思う。

● 石坂 信之

1◆ 片田敏孝『みんなを守るいのちの授業—大つなみと釜石の子どもたち』（NHK出版、2012年1月、児童・学校向け） 片田敏孝『人が死なない防災』（集英社新書、2012年3月、一般向け）

3月11日、東日本大震災による大津波の被害は甚大でしたが、学校管理下にあった釜石の小中学生約3,000名は全員が無事でした。残念ながら、病気で家にいた子供や親御さんに引き取られた子供たちなど5名が津波の犠牲になったのですが、他の地区に比べ、釜石市の小中学生の被害が少ないのは理由がありました。それは、著者らが8年前から行ってきた釜石での防災教育や、これらを契機として先生方や周囲の方々がしっかりとした防災教育や訓練をされてきたからです。

自分の身は自分で守るということ以外に、ある中学校の子供たちは走りながら、小学校の子供たちに大声で避難を呼びかけ、避難所が危険とみるや、さらに高い場所への避難を年少の子供を守りながら対応したとか、避難しないおばあさんを促して一緒に助かるなど、いろいろなケースで適切な行動をしています。この本は、著者が関わってきた釜石市などでの防災教育を通して、自分の「いのち」を守るために今みんなに伝えたいことをわかりやすくまとめています。

著者片田さんのこの本を知るきっかけとなったのは、NHKのクローズアップ現代「子供が語る大震災2（1月17日放送）」で、釜石小の子供たち一人一人が適切に判断し、行動して身を守ったことに感動を受けたことでした。クローズアップ現代は原則的に再放送がないので残念でしたが、最近別な形で紹介されました。それはNHK Eテレ3月11日の「シンサイミライ学校—いのちを守る特別

授業」です。巨大地震による津波が25分で到達する田辺市（和歌山県）の田辺中学校で著者の片田さんが特別授業を行う様子を番組にしています。実は、田辺中の多くの生徒たちは非常ベルが鳴っても避難をしなかったのです。ところが、この授業を通して生徒たちが、真剣なまなざしに変わって行く……という内容でした。

片田さんの防災教育は、一般の防災教育とは一線を画す内容です。行政任せ、他人任せの防災では、いのちを守りきれないことがあるということが出発点なのです。

片田さんはまた、昨今の激化する豪雨では、山地の水害に留まらずその下流の大都市を一挙に襲うかもしれないメカニズムも内在していると指摘しています。また、私が感じているのは厳密な話ではありませんが、日本列島の地震活動は事実上、活動期と静穏期があり、今まで静穏期にあつて日本が繁栄してきたと思っていますが、兵庫県南部地震以来、既に活動期に入ったと思わざるを得ません。命を守るために、この本をご覧くださいませんか？

2◆ NHKスペシャルシリーズ原発危機「メルトダウン～福島第一原発あのととき何が」2011年12月18日放映

福島第一原発での核燃料のメルトダウンはどのように進んだのか、原子炉の水位や圧力、放射線量の記録などのデータを検証し、最新の解析ソフトでシミュレーションを実施しています。また、全電源喪失から、燃料のメルトダウン、水素爆発にいたるまでの詳細な現場での状況を明らかにしていて、特筆される内容です。

この番組によれば、全電源喪失の後でも非常用復水器（イソコン）を使って原子炉を冷却させる手段があったのです。ところが、東電では非常用復水器の基本的な使い方を理解していなかったのです。さらに過酷な事態を把握できなかった重大なミスがあったのです。非常時に原子炉水位計にエラーが起こることが、既にスリーマイル島の事故で明らかになっていたにもかかわらず、東電は何らの対処もしてこなかったため、あの時、誤表示だったにもかかわらず、原子炉内部の水位が燃料棒より上部にあると錯覚してしまったのです。このとき原子炉内部の水はカラになっていて、津波が襲ってから数時間後にはメルトダウンしていたのだという、戦慄した内容を番組は明らかにしています。

数々の安全神話の中で、原発の稼働技術についても過信していたのです。福島第一原発に限らず、原発は停止してからも長い間燃料棒を冷却し続け、核燃料廃棄物を安全に処理していく長い道程があります。廃炉にしてからも、ほんとうに安全に管理していけるのだろうかという懸念を私は抱きます。しかしそれでもなおこの国の数十%の人々は、廃炉ではなく、原発の再稼働を認めるのでしょうか？

3◆ 朝日新聞連載記事「原発とメディア」（3月現在掲載中の記事。私が購読している神奈川県版では夕刊）

この連載では、我が国で原発を開発した当時から、メディアが何を報じてきたかを検証しています。社内の方針の微妙な変遷や記者がどんな記事を書いてきたか、また社内の方針と違う記事によって、記

者の立場が浮き沈みしたことも明らかにしています。

かつて大熊由紀子記者が、原発反対者は原発の安全性を良く知らないのに感情的（非科学的）に行動しているというニュアンスで記事を書いていたのを私も覚えています。当時、大熊さんこそ安全神話に寄り添いすぎていると思っていましたから、福島原発事故後の今では、さすがに大熊さんは反省しているのかと思えば、この連載記事によると、大熊さんはそうではないようで、びっくりです。原発の安全性については、東電や監督する立場の組織と政府、それとメディアの責任が重大だと私は思っていますが、この連載記事はメディア内部の問題点まで浮き彫りにして出せる企画です。

メディアの検証について、少し加えておきたいと思います。専門家の地震に関する発表、発言についてもメディアが何を報じてきたかという課題があります。最近で言えば、1月23日の読売新聞朝刊1面に掲載された首都圏地震についての記事は検証すべきです。ニュースソースは東大地震研究所内部で前年の9月に行われた研究発表の一つです。研究結果のエッセンスは、東日本大震災からの経過時間で変わる統計的な地震発生確率でしたから、記事を書く1月の時点では確率が変わっているのに、前年の9月の発表そのままを記事にしたのです。読売新聞が掲載した後、多くのメディアがこれに追随する記事を書き、報道しました。一方、ある週刊誌は、発表した教授の取材対応が良くなかったから、その教授を誹謗する記事（週刊文春2月16日号）を書いたり、ある週刊誌は「4年以内にM7地震」のヤマ勘予測を増幅させた煽り派メディアは災害だと書いたり（週刊ポスト2月24日号）しています。

その後、読売新聞はニュースソースの「東大地震研究所教授らの試算が波紋を呼んだ」としています（2月16日）が、朝日新聞では池上彰が「新聞ななめ読み」で波紋を広げたのは誰？として、記事の経緯について取り上げています（2月24日）。池上彰の指摘を待つまでもなく、「読売新聞の記事が波紋を呼んだ」のは明らかです。自己検証するなら的確にしてほしい。読者への影響とメディアの責任についてどう考えているのでしょうか。

● 和田 雄志

1◆ 「裸のフクシマ 原発30km圏内で暮らす」著者：たくきよしみつ、出版社：講談社

フクシマの原発事故の原因究明や放射能被害の影響について論じた本はたくさん出ていますが、本書はそれらとは一線を画すものです。30km圏内の川内村に暮らす当事者、生活者として、地震発生直後から、自分の目と体で感じたこと、体験したことがリアルに描かれています。著者は、デジカメやITに強いライターであり、客観的な記述への心配りもなされています。フクシマを自分たちの問題としてとらえるのに、ふさわしい本です。

2◆ 「Café de Monk」：「心の相談室」によるFM放送（シリーズ）

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/kokoro/diary.cgi?page=2&field=8>

震災以降、宗派を超えて被災地を巡回する若手宗教者グループがいる。仏教のお坊さん、キリスト教の牧師、神道の神主などが避難場所の被災者のために巡回傾聴サロン「Café de Monk」（カフェ・デ・

モンク)を開催。提唱者は、宮城県の曹洞宗通大寺の金田諦應住職。それにかかわる様々の人が宮城、岩手、福島の地域FM局でオンエアされた「心の相談室」にゲストとして登場。復興構想会議の玄侑宗旧さん、日野原重明さんなども出演。一番印象に残ったのは、大船渡の開業医で、「ケセン語」で聖書を翻訳した山浦玄嗣さん。被災地での「言葉の力」を感じずにはいられない。上記サイトから、YouTube経由ですべての放送が聴けます。

3◆「さくら」作詞・作曲・歌：やなせなな

<http://www.youtube.com/watch?v=YX6LHTksid8&feature=fvsr>

奈良の浄土真宗寺院の「歌う。尼さん」、やなせななさん。30歳で子宮がんを克服、上記のCafé de Monkの巡回サロンにも参加。震災前にリリースされた曲で、桜の花と亡くなった人の思い出が重なるといった歌詞ですが、被災地ではとても歌えませんでした、とのこと。「蜜柑」という曲も素敵です。彼女、金春流の謡曲もやっています。

● 三輪 佳子

1◆ テオ・アンゲロプロス監督「エレニの旅」(ネタバレ注意)

<http://www.bowjapan.com/eleni/>

1919年、ロシア生まれの3歳の孤児少女エレニが、ギリシャ人一家に手を引かれて難民としてギリシャに入国するシーンから始まる映画です。1949年までのエレニの苦難の半生が描かれています。どのような苦難にも泣くことも叫ぶこともせず静かに耐え、夫・二人の息子を愛しつづけたエレニは、第二次世界大戦とその後のギリシャ内戦で、家族をすべて失います。

ラストシーンは、最後の一人の息子の亡骸を前に、この映画の中で初めて泣き崩れるエレニの姿です。このシーンを見ていた私は、愛の対象をすべて失ってしまったエレニの痛みが、自分の内蔵に伝わってくるような感覚を覚えました。

2◆ ロウヒミエス監督「4月の涙」(ネタバレ注意)

www.alcine-terran.com/namida/

1910年代、内戦下のフィンランドを舞台とした映画です。赤軍の女性兵士が白軍に捕らえられ、強姦され、殺されそうになりますが、うち一人が奇跡的に死を免れます。白軍の将校が彼女に恋愛感情を抱きます。かたくなに戦う姿勢を保ち続けていた女性兵士は、いつしか将校に心を許します。銃殺刑に処せられる運命となった女性兵士は、将校によって解放されますが、将校は銃殺されます。

ラストシーンでは、将校が孤児院に送り込んだ赤軍女性兵士の一人の子どもを、生き残った女性兵士が引き取りにゆき、一緒に歩いてゆきます。女性兵士は妊娠しています。強姦された時に身ごもった子どもです。この映画では、内戦の残虐さも、内戦によって病んでいく人間の心も、あますところなく描

かれています。しかしラストシーンで、戦争を超えて生き延びてゆこうとする生命の息吹に救われる思いがします。

また、優れたフェミニズム映画という側面も有していると感じます。この映画に出てくる女性たちは、男性に好まれる女性としてではなく、自然に「同性として共感できる」と思える存在として描かれています。

3◆ 「(株)木の屋石巻水産」の缶詰

<http://kinoya.co.jp/eccube/>

最後の一作品として、宮城・石巻産の缶詰を紹介させていただきます。

友人の友人が、木の屋石巻水産さんの社員の方と親しかったご縁から、「津波を受けた倉庫に残っていた」という内容不明の缶詰を頂戴しました。缶詰は「カンパのお礼」という形で、一個300円でした。缶詰の内容物は、鯖の味噌煮・クジラの大和煮・鮭の中骨の水煮といった、ごくごくありふれた海産物缶詰だということでした。

まったく期待せずに缶を開けてみた私は、一口ごとに「これがクジラの大和煮?」「これが鯖の味噌煮?」「これが鮭の中骨?」と驚嘆させられました。しっかりした味がつけられており、しかし味付けは濃すぎず、素材の持ち味が生かされており、感動的な味わいなのです。

木の屋石巻水産さんは現在、着実に復興へと歩まれており、少しずつですが缶詰等の生産・販売を再開されています。

東日本大震災は悲惨極まる災害でした。しかし、この災害をきっかけとして知った木の屋石巻水産さんの復興を、今後細々とでも製品を購入しつづけ、おいしく頂きつづけることで応援しようと、私は考えています。

● 石塚 隆記

1◆ 『坂田昌一 原子力をめぐる科学者の社会的責任』、樫本喜一編、岩波書店

なぜ、日本は原発を持つことになったのだろうか? 原発を持つに際して、原発の事故の危険性、あるいは放射性廃棄物の取り扱いの困難性は、時の有識者の間で問題視されなかったのだろうか? 福島原発事故後、こういった疑問を持つようになり、そのような時、偶然本屋で坂田先生の書き残したものを見つけた。それが、この本である。

坂田先生と言えば、元名古屋大学教授で、数年前にノーベル物理学賞を受賞した小林氏と益川氏の先生であり、素粒子の専門家である。どうも私は理論物理の専門家は、なかなか鋭いことを言う方たちであるという先入観がある。それなので、坂田先生の目には、海外から原発を輸入しようとしていた1950年後半の日本がどのように映っていたのかに興味を持った。

ただ、結局のところ、当時の日本では、プルトニウムの軍事利用をどのようにしたら防ぐことができるか? という点についての議論のみまでしかできていなかったようだ。そこで、民主・自主・公開とい

う原子力3原則が提唱され、この3原則でもって軍事利用を防止しようという流れができていったようだ。

本を読み終わってみても、相変わらずまだ分からないのが、なぜ、坂田先生ほどの知識もあり、ダメなものにはダメという勇気のあった方が、放射性廃棄物の長期保管の問題に着目せず、また、地震列島の日本に原発を持ち込むことに不安を感じなかったのだろうかという点である。

2◆『放射線概論—第1種放射線試験受験用テキスト』、柴田徳思編集、通商産業研究社

福島原発で事故が起こってから、一体全体このような状況の中、自分にはなにができるのだろうか？ということを考えていた。まず当時気になったのが、インターネット上にたくさんのデマも含めた放射線のリスクについての情報が流れていたことである。また、様々な人が、さも知ったような顔をして、放射線のリスクについてコメントをしていた。正しい情報がなんのか分からなかったし、黙ってデマを聞くことについてもうんざりしていた。

また、別の観点から気になったのが、放射線の専門家が圧倒的に足りないのではないかとという点である。広大な土地が放射性物質で汚染されたのだから、それをきれいにする作業（除染）が今後始まる。そういった時に、除染従事者の放射線リスクを管理する人が不足することが、気になっていた。

あ、それじゃ、第1種放射線取扱主任者の資格をとろう、と考えるようになり、この本を使って試験勉強を始めた。何遍も読み返したから、いまはぼろぼろになってしまっている。この本では、放射線に関する物理、化学、生物、法律、取扱、それと測定について、説明されている。説明は親切ではないけど、簡単な計算（放射能の衰退など）をやってみようと思う時には、参考になるだろう。

3◆『美味しんぼ』原作：雁屋哲、作画：花咲アキラ、小学館（まだ第15巻くらいまでしか読めてません）

気が付いたら、会社の本棚にこの本が並んでいて、去年くらいから少しずつ読み始めて、今やっと第15巻くらいまでたどりついた。ロングランのまんがなのに、一話一話とても丁寧に描かれている。料理のまんがなのであるが、実は人間関係の大切さを描いている。まさに息抜きに適したまんがである。

● 山田 耕作

1◆「放射性セシウムが人体に与える医学的・生物学的影響—チェルノブイリ原発事故被曝の病理データ」ユーリ・I・バンダジェフスキー著、久保田護訳 合同出版 2011年

本書についてはすでに訳者久保田氏によって自費出版され、多くの要望があり、昨年末英文つきで出版されたものである。現在、福島原発事故による放射線被曝を考慮する上で不可欠の必読文献であると思う。この本の意義について重ねて紹介したい。

1) 通常、内部被曝の評価に当たり、国際放射線防護委員会（ICRP）に従って、実効線量係数をかけ

てベクレルからシーベルトに変換して被曝が評価される。この本に書かれている重要なことは体重 1kg あたりのセシウムのベクレル数と病気を直接対応させたことである。例えば、p 19 「心電図異常の発生率と体内放射性元素の濃度の相関」によると、3 から 7 歳の子供で約 18Bq/kg の時に心電図異常が 60%、55Bq/kg の時に 90%になっている。これらの異常は心筋内伝導障害などで、突然死が増大していることが重大である。血圧の上昇などとあわせ、異常の起こるのは 20 から 40Bq/kg の低濃度で起こる。しかしこれはシーベルトに直すと 0.01mSv で安全な量とされている被曝量であるということである。それ故、ベクレルで直接危険性を評価しなければ意味がないということである。これは内部被曝の評価を根本から見直すことになる。食品基準にも当然影響する。

2) バンダジェフスキー氏は臓器への取り込みによる病気を「長寿命放射性元素の体内取り込み症候群」と名づけ、セシウムが体内に蓄積し、各臓器を絶えず攻撃することによって重大な病気が引き起こされることを病理解剖と動物実験によって確認している。臓器は心臓、脳、肝臓、甲状腺、腎臓、骨格筋、小腸などである。心臓や脳など細胞分裂が活発でない臓器はセシウムで破壊されると修復が出来ず回復がいつそう難しいということである。このようなことが死亡率を高め、出生率の減少とあわせ、ベラルーシでは人口の絶対数の減少をもたらしている。

3) 放射性セシウムによる膀胱炎から膀胱癌への進展を調べた病理検査による論文に対してベクレル数でもっと高いカリウム 40 を無視しているという批判がある。しかし、カリウムは体内をスムーズに循環し、臓器に取り込まれない。このことは進化の立場から市川定夫氏によって環境論の中で言われてきたことである。ベクレル数ではカリウムに比べて低い人工の放射性セシウムが臓器に取り込まれることによって、臓器を破壊するのである。バンダジェフスキーの研究では放射性セシウムの汚染がないところではカリウム 40 があっても臓器の障害はなく、取り込み効果の重要性が本書で実証されたことも重要であると思う。

4) 放射性セシウムは子供なら 40 日で大人なら 70 日で体外に半分でるとされる（生物学的半減期）。毎日 1Bq 取り込むとして、計算すると一年程度でそれぞれ 60, 100Bq が身体に蓄積される。もし、毎日 10Bq 取り込むと 600、及び 1000Bq が身体に蓄積される。子供の体重 20kg、大人を 60kg とすると体重 1kg あたりそれぞれ 30Bq/kg, 17Bq/kg の濃度となり、バンダジェフスキーの本によると心電図や血圧の異常が発生する濃度である。それ故、1日 10Bq 取り込むのも危険であるから、ほとんどゼロのものしか食べてはいけないことになる。実際、来日したバンダジェフスキーはそう言っている。

2◆「原発閉鎖が子どもを救う」ジョセフ・ジェームズ・マンガーノ著、戸田清、竹内真理訳、緑風出版 2012年

英語題名 Radioactive Baby Teeth : The Cancer Link であり、グールドやスターングラスの協力者である、Joseph J Mangano 博士の著書である。大気圏内核実験や原発等の核施設の定常運転による被曝による被害を証明するのは難しい。これを乳歯のストロンチウム 90 の量と小児癌の相関を調べることにより証明した、科学的な成果の読みやすい報告である。本書によると、原子炉の近くのストロンチウム 90 の量が増えると、その数年後に小児癌発生率が増大する。逆にストロンチウム 90 のレベルが下がると小児癌も減少することを示した研究である。全米の母親達の熱意に支えられた大変意義のある研究成果である。訳者二人戸田、竹野内両氏の意見やあとがきは優れた内部被曝に関する解説にも

なっており、上で紹介したバンダジェフスキー博士のことも紹介されている。

3◆「見えない恐怖－放射線内部被曝－」松井英介著、旬報社 2011年

放射線内部被曝に関する適切な解説書である。長くなるので省略するが内部被曝が広く紹介されている。

● 角田 季美枝

1◆ 上田篤、田中充子『蹴裂伝説と国づくり』鹿島出版会、2011年、2800円＋税

人間の世界認識のなかで、自然環境はどのような影響を与えているか。

政治学では脱物質化といわれているが、環境問題では二酸化炭素などの物質で考えさせられることが多い。それはそれで否定はしないが、全体像や構造を把握するのはそれだけではつまらない。ヒトがどのような環境に暮らしているのかに注目するのであれば、「地形」はそれを考える良い手だてである。2011年に読んだなかで、この点についてダントツにおもしろかったのがこの本だ。

建築学者である上田篤氏は、「住まい」を「建築物」から「国土」まで俯瞰して研究し、鎮守の森構想、水網都市構想を提案しているが、その過程で日本の伝統（民俗文化）にも注目する。たとえば「神社」はどこに建てられているかといったことである。この本のタイトルになっている「蹴裂（けさき）伝説」は、民俗学の研究テーマであり、「神・仏・鬼・龍・大蛇・巨獣・巨魚・巨人・異人・巫女などといったおどろおどろしいいわば〈怪物〉たちが、その超能力によって湖を蹴ったり裂いたりして沃野をつくった」とする話（21ページ）で、日本列島各地にそのような伝説があるそうだ。

そして、「古代日本の水辺をなくしたのは自然の沖積作用だけではなく、あるいは災害だけではなく、これら〈怪物たち〉も力があつたのでは？」と考えたという。そして伝説のなかにはかなり現実的な話や具体的な歴史上の人物も登場することもあることから、「ひょっとするとほんとうに〈怪物〉がいたかもしれない」と思うと、胸がドキドキしたという。そして自身でも奈良盆地の形成を調べて公表した。そのうち全国各地もと考えていたものの、あつという間に30年という時間がたち、定年のため、自分で調べるといふ夢はかなわなくなった。本書はそれをついだ国土史を専門とする田中充子氏が各地を歩き、調査をおこなった。その結果をふまえて、「日本の国づくり論」を上田がまとめている。

田中氏が歩いた場所は以下である。

北海道・旭川、山形・最上小国、群馬・沼田、山梨・甲府、長野・上田、長野・松本、京都・亀岡、兵庫・出石、大分・湯布院、熊本・阿蘇

見る人が見れば「アヤシイ」場所ばかりなのだ。これがおもしろくないわけがない！

田中氏の報告をふまえて抽象化していく上田氏の「結論」もおもしろいのだが、現物・現場・現実重視の私としては、歩いて現在の景色や地形をみる、図書館などで郷土史の文献や民間伝承を確認する、郷土史家に話を聞きに行くなど、田中氏のフィールドワーク報告を非常にわくわくして読んだ。

調べていくうちに、いろいろな謎がときあかさされ、さらなる問いになっていく。それでも残る問い。このようなプロセスを追体験できる報告になっているからだ。また、これらの調査を経てつむぎだされる言葉も非常に楽しい。たとえば、「日本列島の地形は、ようするにウナギのセナカとスキマではないか」「人々はなぜ古墳づくりに精を出したのか」「観光は啓示である」……。

田中氏の報告を読んであらためて痛感したのは、万年単位の地形の変化への想像力をどう身につけていくことができるだろうかということである。ここ数年、この点こそが環境教育（とくに水害などの自然災害に関する環境教育）のキモではないかと考えている。その観点から本書をみると、地域の伝承をひもとくさいにも、あくまでもそこにある「国土」や国土改変の「技術」「道具」、改変当時の「自然環境要因」にこだわりつづけることが重要という留意点がてんこもりであり、フィールドワーカーにとっては読書といえるだろう。

2◆ 片田敏孝『人が死なない防災』集英社新書、2012年3月、760円＋税

東日本大震災の津波の被害者が1000人を超える釜石市で、小中学生のほとんどは主体的に避難して生存した。その背景に、群馬大学の片田敏孝氏（専門は災害社会工学）の発案による防災教育があることは、各メディアで賞賛されている。

片田氏の研究をいかした防災教育がどのような内容なのかを知るには、「釜石市津波防災教育のための手引き」で知ることができる（http://www.ce.gunma-u.ac.jp/kamaishi_tool/index.html）。

しかし、片田氏は本書の「はじめに」でこう書いている。

「避難さえすれば津波による犠牲者はゼロにできる。そんな思いを釜石市民に訴え続けてきたにもかかわらず、膨大な犠牲者を出してしまった。防災研究者として敗北を認めざるをえない。」（9ページ）

本書は、「東日本大震災を経て、今の日本の防災に求められることは、人が死なない防災を推進することであり、それこそが防災のファーストプライオリティだと考える」（11ページ）という問題意識から、あえて講演録集という形でまとめたという。

収録されているのは、以下の講演をもとにした記録である（収録順）。

- ・2011年10月2日、群馬県沼田市での防災講演会での講演「人が死なない防災--東日本大震災を踏まえて」
- ・2010年7月2日、岩手県立釜石高校での高校生向けの講演「津波を知って、津波に備える」
- ・2005年12月7日、社団法人システム科学研究所主催防災シンポジウムでの講演「なぜ人は避難しないのか」
- ・2010年8月27日、平成22年度茨城県砂防協会講演会での講演「求められる内発的な自助・共助」

これらの講演の内容は、釜石での津波の防災教育、防災教育に対する住民とのやりとり、今後の日本の気象災害の発生可能性、災害対策基本法にもとづく防災行政の枠組みの限界、日本の防災教育の問題点、主体的に動ける身体づくりの実際、子どもの主体性を育てるための親へのアプローチの方法、人間の心理的バイアス、地域の自主防災関係者が自ら気づくための発言など、多岐にわたり、非常に実践的な内容である。

私がこの講演録を読んで、最も共感をもったのは、子どもが自分の住んでいる地域を嫌いにならない点をおさえるという姿勢である。また、「脅し」や「知識」の防災教育ではなく、災害文化を育むような継承のしかたをそれぞれの地域で議論する必要があるという指摘は、防災教育の懐の深さや広さを示している。

東日本大震災後はどうしても大地震や大津波に注目がいきがちな状況だが、本書は、水害、土砂災害などにも展開可能な内容であり、東日本大震災以降の地域防災の「間違い」を点検できる（つまりは主体的になる）視点を得ることができる。

●メアリー・マイシオ（中尾ゆかり訳）『チェルノブイリの森 事故後20年の自然誌』NHK出版、2007年2月、2200円＋税

すでにこの本の紹介を上田さんがしている（リビングサイエンスアーカイブ、2008年8月18日投稿記事；<http://www.csij.org/archives/2008/08/20.html>）。本書の内容や意義はそこで丁寧に紹介されているとおりが、簡潔にまとめておこう。

マイシオ氏は執筆当時、キエフに住むウクライナ系アメリカ人の女性ジャーナリスト（大学時代の専攻は生物学と法学）。初めてチェルノブイリ地区に取材で足を運んだ1996年以降、たびたび訪れ、本書でチェルノブイリの森、草原、湿地、河川などの生態系の状況や、危険区域の村に戻って住んでいる人びとの暮らし、石棺の状況などをまとめている（原著刊行は2005年出版）。

まだ高い線量の放射性物質が自然の一部になってしまっただけではなく、人間という要因が激減したチェルノブイリの生態系。著者は、初めて訪問した1996年、「悲愴な予言などものともせず、ヨーロッパ最大の自然の聖域として息を吹き返し、野生の生物で満ちていた。動物は、思いもかけず魅力的な棲みかとなった森や草原や沼と同様に、放射性物質ですっかり汚染されている。しかも、誰もがあっけにとられたことに、繁栄してもいるのだ。」（19ページ）と驚いている。

東京電力福島原子力発電所の事故で福島、宮城の森や川はどうなっていくだろうか、ということイメージしたかったのが、今回初めて読んでみたのである。もちろん、日本の東北地方の自然はチェルノブイリとは異なる（植生、降水量、土壌など）ので、チェルノブイリの森と同じというわけではないだろう。居住地との近さも違っている。しかし、一般的な書籍で入手できるのは、いまでも本書しかないのかもしれない。生物種によって放射性物質の影響が異なるのは当然として、同じ生物で同じ場所に住んでいる種によっても汚染の程度が違うことなど、非常に興味深い事実の報告がある。たぶん今後も何度となく読み返すことになるだろう。

● 鈴木 綾

1◆『11をさがして』パトリシア・ライリー・ギフ作 岡本さゆり訳 佐竹美保 絵 文研出版

サムの誕生日は4月11日。誕生日前にプレゼントを探し出すのは例年のこと、11才の今年の隠し場

所はきっと屋根裏部屋だとねらって探しに行くと、見つかったのはサムの子頃の写真の載った古い新聞だった。ディスレクシア(識字障害)のためにうまく読めないサムにもかろうじて読めたのは「行方不明」の語！ この時、一体何があったのか。ミステリー仕立ての物語で、不思議な夢、不可解な新聞記事、フラッシュバックするサムの記憶に、どきどきしながら読み進んだ。最後は児童文学にふさわしい大団円だが、そこまでの過程は大人も満足のいく展開。

主人公サムが魅力的。マックとオンジとケララという国際色豊かな頼もしい大人達に愛されて育ったのびやかさと素直さ、人間性がいい。教室ではバカもやる普通の少年が、突然出生の秘密に触れ、ルーツ探しを始める。ところが「読めない」。サムのやりきれなさ、切なさ、怒りが手に取るように伝わる。もの作りの才能がサムの支え。理不尽なこと、苦しいことは誰にも起こるが、それを乗り越える力も備わっているのだと、気づかせ、背中を押してくれる大人と友達も大事。

2◆ 『舟を編む』 三浦しをん (光文社)

好きでないと絶対できない仕事の一つ、辞書の編纂。ある辞書が世に出るには、その志ある会社の中で、言葉の専門家と編集の専門家と営業の専門家と専門家を切り替える専門家と膨大な数の下調べをする人とそのような人を雇うためのお金が必要で、編纂の企画ができて辞書になるまで、軽く10年単位で取り組まなくてはならない。辞書の原稿ができるその時間を経て、さらに辞書のための特殊な紙を作る会社、印刷製本する会社、広告宣伝会社、書店 etc.が関わる。しかも出来上がったとたんに辞書は改訂版を作る体制に入らねばならない。辞書とは、無限で、無数に生まれる言葉の海の中から、ある秩序を持って選ばれた言葉を限られたスペースに過不足なく語義と用例を併せて収録するものだ。既存の辞書と違う何かを持って、しかも独断ではない利用者への配慮を持って、新辞書は作られる。この小説はそのような辞書作りの過程をつぶさに追いつつ、そこに関わる専門家と非専門家のフシギでおかしいやりとりを描く。営業部で役立たずの新人だった馬締は定年間近の辞書編集部のベテランに見込まれ編集部に異動し「大渡海」の編纂を始める。問題山積みの編集部で愛すべき変人たちが恋に仕事に右往左往。言葉の海を渡る舟、「大渡海」は編み上がるのか？

3◆ こまつ座『日本人のへそ』

一昨年亡くなった井上ひさし氏の舞台デビュー作は、東北の片田舎から「金の卵」として上京し、カラダを張って生き延びていったある女(ストリッパー)の周辺を描いたミュージカルコメディである。昨3月21日、余震と計画停電と間引き運転の続く中、観に行った。観る前から、音楽監督&ピアニストが小曾根真、どんな舞台になるんだろうと大きな期待を抱いていた。その一方で、たくさんの芝居やイベントが「自粛」や中止になっている時期に、東北をネタに笑っているのか？とどこかで後ろめたかったのも事実。役者たち自身も3.11後、この芝居を続けるべきか、やめるか、真剣に悩んだという。が、やめなかった。それは、この作品の中に、井上ひさしが東北に抱く深い深い愛があるからだろう。不幸な出自の女は、関わる男たちに次々踏みつけにされるが、その度、不死鳥のようにしたたかに甦り、しかもステップアップし、「美しく」なっていく。常に都会の繁栄を支え、貧しさと厳しい自然に向き合ってきた東北の人々の底知れない強さと意地に対する井上ひさしの複雑な思いと厚い信頼を感じた。

● 上田 昌文

1◆『高橋是清—日本のケインズ その生涯と思想』（リチャード・J・スメサート／鎮目雅人、早川大介、大貫摩里・訳／東洋経済新報社 2010年）ほか

3.11の大震災以後、それ論じた、あるいはそれに関連したテーマ（地震、津波、原発、放射能、防災、エネルギーなど）を扱った書籍や報告書や論文などが非常に多く刊行された。私が目を通したのはそのごく一部だが、それでもかなりの数にのぼる。大半は、自身の調査活動の資料として参考にさせてもらったものだが、じつはそのなかには、震災前に書かれたものでありながら、震災後の私たちに大きな示唆を投げかけていると強く感じた書物が何点かあった。“国づくり”を担う政治家が今どうあるべきかを、改めて厳しく問うているという意味で、最も強く心に残ったのは、高橋是清と後藤新平の足跡を論じた数冊の書物である。

高橋是清では、誰をも魅了してやまない伝記と自伝が、それぞれ1冊ずつ容易に手に入る。『高橋是清—日本のケインズ その生涯と思想』（リチャード・J・スメサート／鎮目雅人、早川大介、大貫摩里・訳／東洋経済新報社 2010年）と『高橋是清自伝』（上巻・下巻、中公文庫 1976年）だ。数々のエピソードに彩られたその破天荒の人生は—正規の教育をほとんど受けず、実地に身につけた英語力を駆使していくつもの失敗を乗り越え、豊富な人脈と経験によって骨の髄まで浸透した国際主義を財務家、日銀総裁、大蔵大臣、総理としても発揮し（例えば日露戦争の時に財務官として英国に渡り、欧米から戦費の47%を調達させた）、実務家としての先見から昭和恐慌において世界の模範となるマクロ経済政策を打ち出し（世界の常識に逆らって、金本位制から離脱して緊縮財政路線の転換を断行、日銀の国債引受けでマネーサプライを大幅に増やし、在任中の名目国民所得を60%も成長させた）、その楽天的でユーモラスな性格から人々の敬愛を集めるものの、最後は2.26事件で軍部の凶弾に倒れる—それ自体、無類に面白いが、第一次大戦時の景気が崩壊した後の1920年代における金融危機を伴う長期停滞と、90年代のバブル崩壊後現在にいたる長期のデフレが、重なって見えてくる中で、3.11大震災の復興には—今の政治家たちの器の小ささをあまりにしばしば見せつけられるにつけても—高橋是清が示したようなリアリズムと気概と実行力が必要とされているのではないか、との思いが深まるばかりだ（例えば高橋は当時すでに、興業銀行を各地方に作り、当時の基幹税であった地租を地方移譲し、教育・土木・衛生や産業政策は地方に任せ、知事の公選制を導入する、といった提案をしている）。

後藤新平では、私が読んだのは『後藤新平の「仕事」』（藤原書店編集部／藤原書店 2007年）、そしてこの本の第3章「後藤新平」は次の本の該当する章の再録になっていたが、その元本である『明治の人物誌』（星新一／新潮文庫 1998）、それに加えて『小説 後藤新平—行革と都市政策の先駆者』（郷仙太郎／学陽書房 1999）であるが、星新一のわずか54頁の小伝だけでも、後藤新平がきわめて興味深い大人物であることがただちにわかる（星新一のこの本につられて、後藤新平とも深い親交のあった、星新一の父、星一（ほしはじめ）を描いた伝記『人民は弱し 官吏は強し』（星新一／新潮文庫）も興味深く読んだ）。

後藤は関東大震災の直後に内務大臣兼帝都復興院総裁に就任し、震災復興計画を立案したことはよく知られている。遷都せず、欧米各国の都市計画を模範として新都を造営し、都市計画実施に際して地主

に断固たる措置をとる、といった方針で、なんと当時の国家予算の2年分にも相当するような巨額を投じようとした。19世紀半ばにナポレオン3世治下のオスマンパリ市長が行った「パリ大改造」を参考に、土地を地権者から大胆に収用する手法をとろうとしたが、激しい地主・地権者の抵抗を受けることになったのは容易に想像がつくだろう。復興計画は部分的にしか実現しなかったが、例えば火災の延焼防止と都市空間の美観のために100メートル道路を建設することは後藤の念願であり、その片鱗が今の「昭和通り」にうかがえる。墨田、錦糸、浜町公園や横浜の山下公園も後藤の計画に含まれていたものだ。日本の土地政策の最大の軛（くびき）というべき「絶対的私有権」に対して果敢に挑戦しようとした後藤の遺志を、3.11大震災の後こそしっかり受け継いで「公共財としての土地」のあり方を打ち立てていかねば、被災地の復興ばかりか、日本の持続的な発展も望めないのではないかと私は感じている。

2◆ ヘルベルト・シュッフが弾くラヴェルの「鏡」「夜のガスパール」など

2011年はついに一度もコンサートに行かなかった。これまでもお金と時間の制約のために自宅でCDを再生して楽しむ比率が高くなって久しかったのだが、2011年は土曜日・日曜日に講演を引き受けることがうんと多くなり、バタバタして年を越してから、自分が音楽会会場にまったく足を運んでいなかったことに気づいたのだった。その分、電車の行き帰りや自宅で就寝間際に短めの曲を選んで集中して聴いたといえるかもしれない。以前から愛聴している曲をおなじみの演奏で繰り返し聴いた、という場合も多いけれど、中には、なじみの曲ではあるが、偶然に新しい演奏に遭遇し、それが飛び抜けて魅力的だったために、時が経つのをまったく忘れてしまう、という嬉しい体験をした場合もある。ここで言う偶然とは、2011年に出た新譜ではないけれど、衛星音楽放送番組の番組表でその曲名を見つけ、同じ曲のCDを何種類も持っているにもかかわらず、「名前を聞いたこともないこの演奏家はどんな演奏をするのだろう」との好奇心から録音してみたら……ということにすぎない。以後決して忘れないだろうその衝撃の出会いの演奏—2011年のそのひとつは、ともにモーリス・ラヴェルのピアノ曲を弾いた、ヘルベルト・シュッフ（Herbert Schuch, ルーマニア生まれ）の2枚（[Oehms:OC733](#), [Oehms:OC541](#)）と多紗紗里（おおのさおり）の1枚（[Livenotes:WWCC7662](#)）だ。ラヴェルのピアノ曲は、いってみれば極上の美酒が与えるような、（精神性とはほぼ無縁の）研ぎ澄まされた感覚の愉悦を狙ったものであって、技巧的に一点の揺るぎもない高い完成度の演奏に恵まれてこそ、その愉悦を極めることができる。シュッフならびに多がそれぞれ繰り広げる光彩陸離たるシャープな演奏は、おそらくこれらの曲に馴染んできたどんな人にも、驚きと陶酔の時を約束するのではないかと。癒しや心の平安とはおよそかけ離れた、華麗な戯れの音魔術の世界なのだが、それへの深い没入が心身をことのほか解放してくれるように感じるの、なぜなのだろう？

2011年に出た新譜では、次の4点がことに心に残るものだった。いずれも燃焼度の高い個性的な名演だと思う。

- ・ショスタコーヴィチ：交響曲第14番（クルレンツィス指揮ムジカエテルナほか）

<http://www.hmv.co.jp/product/detail.asp?sku=3812534>

「死」を扱った音楽の最右翼として。

- ・シューベルト：ピアノ・ソナタ第21番、さすらい人幻想曲（原田英代:ピアノ）

<http://www.hmv.co.jp/product/detail.asp?sku=4165088>

ひたすら曲の核心をつかまんとするその気迫、大胆さと緻密さの結合したピアノリズム。

・オルフ：カルミナ・ブラーナ（2台ピアノと打楽器版）（ベック指揮シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン祝祭合唱団ほか）

<http://www.hmv.co.jp/product/detail.asp?sku=4319958>

曲が持っていたリズムの野生を再認識。

・「白夜～ノルウェーの民俗音楽の印象」（ペデーシェン指揮ノルウェー・ソリスト合唱団）

<http://www.hmv.co.jp/product/detail.asp?sku=3977474>

北欧音楽の“原像”とも思えるメロディと響きの数々を、心温まる透明な合唱とハリングフェレ（ヴァイオリン）の演奏で。

3◆『子どもの考える力をのばすものづくり』（監修：ものづくり協力会議／教育図書 2011） ほか

2011年の市民科学研究室のクリスマス会では、参加者にふだん自分が愛用している「おすすめグッズ」を写真で投影して皆に紹介してもらおうというコーナーを設けた。使っている人の深い愛着が伝わるもの、意外にも知られていない便利な品、グッズよりも紹介するその人の人となりも多く語るもの……等々、とても楽しいひと時を共有できたと思う。私がある時に紹介したのは普段愛用している文房具の類で、使い切るまでインクが途切れない（インクに圧力がかかっているのに仰向けになっても書ける）、すぐれもののボールペン「[パワータンク](#)」と、事務所で電話機の横において、紛失しがちなメモ用紙がわりに電子的にササッとメモ書きができる小さな置物「[マメモ](#)」だ。毎日使っていて、その軽快な使い勝手の良さになじんでしまったので、他のものはもう使わないだろう。

もう一つ、最近手にした変わり種のグッズを挙げておきたい。「[ナイス蚊（か）っち](#)」というふざけた名前の“虫取り器”なのだが、小さなテニスラケットのような形をしたお遊びグッズかと思いきや、（単三電池2本の）静電気を使ったその効果にびっくりした。止まっているのも、飛んでいるのも、ラケット面を近づけて触れるか触れないかの一撃で撃退できる（小さい火花が出て蚊が焼けることもある）。私の長年の特技の一つは、止まっている蚊をカセットケースを使って生け捕りすることなのだが、この新たな“ハイテク”の出現で、積年の鍛え上げた技が衰えていくかもしれない。それはさておき、「ナイス蚊っち」は夏場に蚊に悩まされている人には救世主となるかもしれない優れものだと思う。

最後に「道具」ではなが、感謝の意を込めて、ゆしめと笑いを与えてくれた2つの書物を挙げておきたい。

一つは、2011年もたくさん様々な方々から書籍や資料をご寄贈いただいたが、その中で一番愉しませてもらった本で、[『子どもの考える力を伸ばすものづくり』](#)というもの。鳥取大学がJSTの助成を受けて（2008年～2010年）、県内に複数箇所で作った「ものづくり道場」のための教材集だ。地域で育まれてきた伝統技術に目を向け、そのノウハウを受け継いでいくきっかけとして、ものづくり体験は重要だし、内容も興味深い。この教材集はぜひ多くの人に手にとってほしい貴重な労作だ。

もう一つは、1ページで平均3回笑えるとして、1冊で618回笑える『[迷解 国語笑辞典](#)』（郡司利男／東京堂出版 2008）。例えば、【あ】の項でいくつか拾ってみると、

【あきらめ【諦め】】 気の弱い夫が妻と外出して、美人とすれちがうときに味わう崇高な気持ち。

【あご【顎】】おいしければ「落ち」、食べぬと「干上がり」、笑うと「外れる」、なにかと世話のやける旦那。

【あんざん【暗算】】割勘（わりかん）のとき、めいめいが頭の中でやっている計算。といった秀逸な（？）語釈のオンパレードだ。この著者、英語学の重鎮のお一人なのだが、日本語の蘊蓄もすごい。心から愉しませていただきました。

P.S. 2011年の私の「100円文庫」（古本屋で最低価格でカゴ売りされるようになって、はじめてそれ入手して読む、少し前の売れ筋の文庫本）のおすすめは、『チャイルド44』（トム・ロブ スミス／上下、新潮文庫）。一気に読みさせてしまうストーリー展開と、登場人物のありきたりでない心理の描出が素晴らしい。米国の人気TVドラマ『24（トゥエンティ・フォー）』にも通じる、スパイ、密告、謀略……を心しておかねばならない緊張が全編を覆っている。（いつか100円で読むだろう続編の『グラーク57』『エージェント6』とあわせて）旧ソ連の収容所群島たる姿に迫った数少ない小説の一つだろうと思う。2011年に新たな「100円文庫」を探す楽しみを与えてくれたのは、倉橋由美子の『偏愛文学館』（講談社2005）という古本屋で見つけた本だ。ここで取り上げられている39冊の小説の半数は既読だったが、著者の怪奇好みの趣味が私とかなり重なるところがあって、「未読の本を100円で手に入れてやろう！」という目標ができた。楽しいかな、古本屋巡り！